

令和4年度

運動部活動の地域移行を考えるフォーラム

-スポーツ少年団緊急プロジェクト スポーツ少年団活性化事業-



主催：公益財団法人宮城県スポーツ協会宮城県スポーツ少年団

公立中学校の休日の 部活動の地域移行について

宮城県教育庁保健体育安全課

1

「部活動の地域移行」に関する県の組織と役割分担

教育庁保健体育安全課

- 学校運動部活動に関わるもの
- 移行措置に関わるもの

企画部スポーツ振興課

- 地域クラブ活動（スポーツ）に関わるもの
- 移行後の運営に関わるもの

教育庁生涯学習課

- 学校文化部活動に関わるもの
- 移行措置に関わるもの
- 地域クラブ活動（文化芸術）に関わるもの
- 移行後の運営に関わるもの

2

部活動改革の経緯

検討会議提言より

「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」（平成30年3月）

生徒に望ましいスポーツ環境を構築する観点に立ち、運動部活動がバランスのとれた心身の成長等を重視し、**地域、学校、競技種目等に応じた多様な形で、最適に実施**されることを目指す。
生徒のスポーツ環境の充実の観点から、学校や地域の実態に応じて、スポーツ団体、保護者、民間事業者等の協力の下、**学校と地域が協働・融合した形で地域におけるスポーツ環境整備を進める。**

「新しい時代の教育に向けた持続可能な学校指導・運営体制の構築のための学校における働き方改革に関する総合的な方策について」（中教審答申・平成31年1月）抜粋

特に、中学校における教師の長時間勤務の主な要因の一つである部活動については、地方公共団体や教育委員会が、学校や地域住民と意識共有を図りつつ、地域で部活動に代わり得る質の高い活動の機会を確保できる十分な体制を整える取組を進め、環境を整えた上で、**将来的には、部活動を学校単位から地域単位の取組にし、学校以外が担うことも積極的に進めるべきである。**

公立の義務教育諸学校等の教育職員の給与等に関する特別措置法の一部を改正する法律案に対する付帯決議（衆・令和元年11月、参・12月）抜粋

政府は、教育職員の負担軽減を実現する観点から、**部活動を学校単位から地域単位の取組とし、学校以外の主体が担うことについて検討を行い、早期に実現すること。**

「学校の働き方改革を踏まえた部活動改革について」（令和2年9月）抜粋

休日の部活動における生徒の指導や大会の引率については、学校の職務として教師が担うのではなく地域の活動として地域人材が担うこととし、地域部活動を推進するための実践研究を実施する。その成果を基に、**令和5年度以降、休日の部活動の段階的な地域移行を図るとともに、休日の部活動の指導を望まない教師が休日の部活動に従事しないこととする。**

3

保健体育安全課

「運動部活動の地域移行に関する検討会議提言」令和4年6月
「文化部活動の地域移行に関する検討会議提言」令和4年8月



「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」平成30年
「文化部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」平成30年

統合・全面改訂



「学校部活動及び新たな地域クラブ活動の
在り方に関する総合的なガイドライン」

※今後、学習指導要領解説の見直し並びに兼職兼業に係る手引き等を通知予定

4

保健体育安全課

改定の背景

○深刻な少子化に伴い、学校部活動の体制維持が困難となってきた。

○教師にとって学校部活動は、大きな業務負担となっている。

目指す姿

○生徒が将来にわたり、スポーツ・文化芸術活動に継続して親しむことができる機会を確保する。

○学校と地域との連携・協働により、持続可能な活動環境を整備する。

5

学校部活動及び新たな地域クラブ活動の
在り方等に關する総合的なガイドライン

令和4年12月

スポーツ
文化



I 学校部活動

教育課程外の活動である学校部活動について、実施する場合の適正な運営等の在り方を、従来のガイドラインの内容を踏まえつつ示す。

(主な内容)

- ・教師の部活動への関与について、法令等に基づき業務改善や勤務管理
- ・部活動指導員や外部指導者を確保
- ・心身の健康管理、事故防止及び体罰・ハラスメントの根絶の徹底
- ・週当たり2日以上¹の休養日の設定（平日1日、週末1日）
- ・地方公共団体等は、スポーツ・文化芸術団体との連携や保護者等の協力の下、学校と地域が協働・融合した形での環境整備を進める

6

II 新たな地域クラブ活動

学校部活動の維持が困難となる前に、学校と地域との連携・協働により生徒の活動の場として整備すべき新たな地域クラブ活動の在り方を示す。

.....
(主な内容)

- ・地域クラブ活動の運営団体・実施主体の整備充実
- ・地域スポーツ・文化芸術担当部署や学校担当部署、関係団体、学校等の関係者を集めた協議会などの体制の整備
- ・指導者資格等による質の高い指導者の確保と、都道府県等による人材バンクの整備、意欲ある教師等の円滑な兼職兼業
- ・競技志向の活動だけでなく、複数の運動種目・文化芸術分野など、生徒の志向等に適したプログラムの確保
- ・休日のみ活動をする場合も、原則として1日の休養日を設定
- ・公共施設を地域クラブ活動で使用する際の負担軽減・円滑な利用促進
- ・困窮家庭への支援

7

III 学校部活動の地域連携や 地域クラブ活動への移行に向けた環境整備

新たなスポーツ・文化芸術環境の整備に当たり、多くの関係者が連携・協働して段階的・計画的に取り組むため、その進め方等について示す。

.....
(主な内容)

- ・まずは休日における地域の環境の整備を着実に推進
- ・平日の環境整備はできるところから取り組み、休日の取組の進捗状況等を検証し、更なる改革を推進
- ・①市区町村が運営団体となる体制や、②地域の多様な運営団体が取り組む体制など、段階的な体制の整備を進める
※地域クラブ活動が困難な場合、合同部活動の導入や、部活動指導員等により機会を確保
- ・令和5年度から令和7年度までの3年間を改革推進期間として地域連携・地域移行に取り組みつつ、地域の実情に応じて可能な限り早期の実現を目指す
- ・都道府県及び市区町村は、方針・取組内容・スケジュール等を周知

8

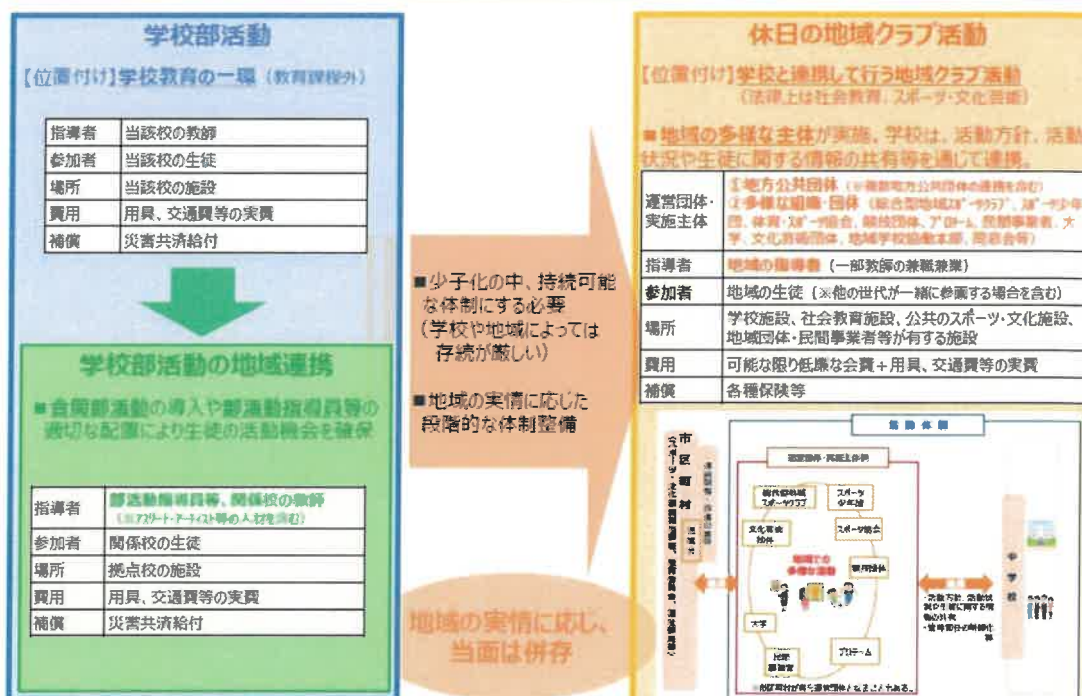
IV 大会等の在り方の見直し

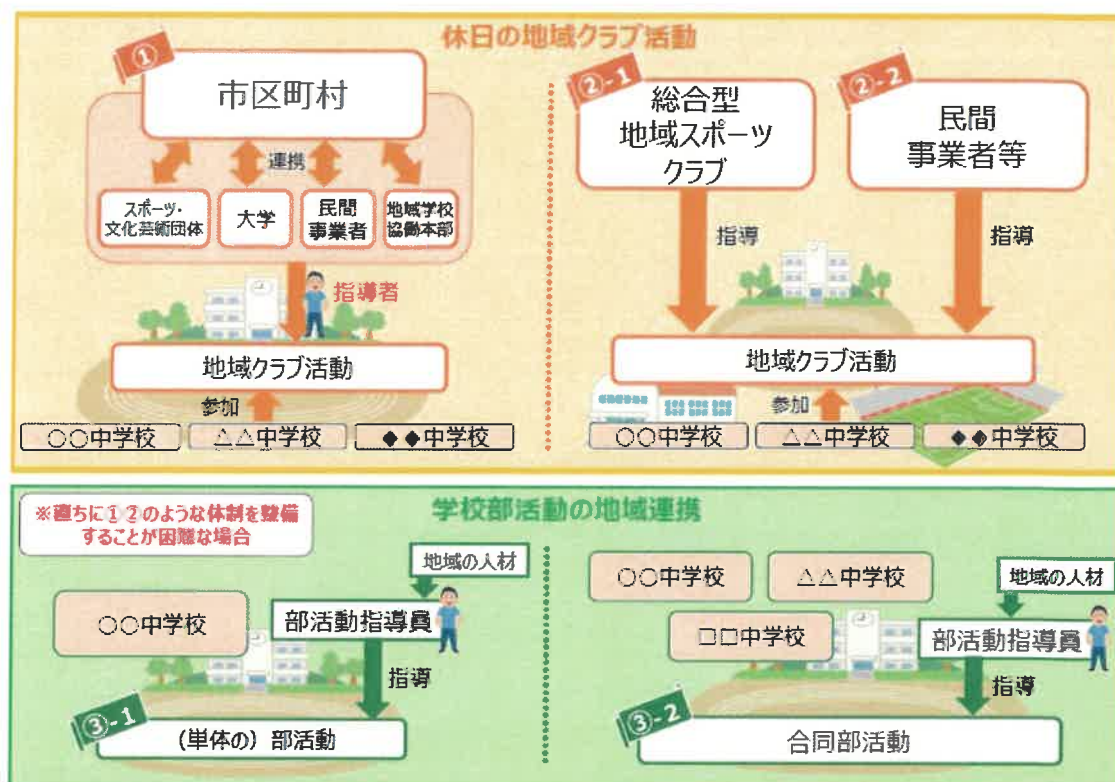
学校部活動の参加者だけでなく、地域クラブ活動の参加者のニーズ等に
応じた大会等の運営の在り方を示す。

(主な内容)

- ・大会参加資格を、**地域クラブ活動の会員等も参加できるよう見直し**
※日本中体連は令和5年度から大会への参加を承認、その着実な実施
- ・できるだけ**教師が引率しない体制の整備**、運営に係る適正な人員確保
- ・**全国大会の在り方の見直し**（開催回数の精選、複数の活動を経験したい生徒等のニーズに対応した機会を設ける等）

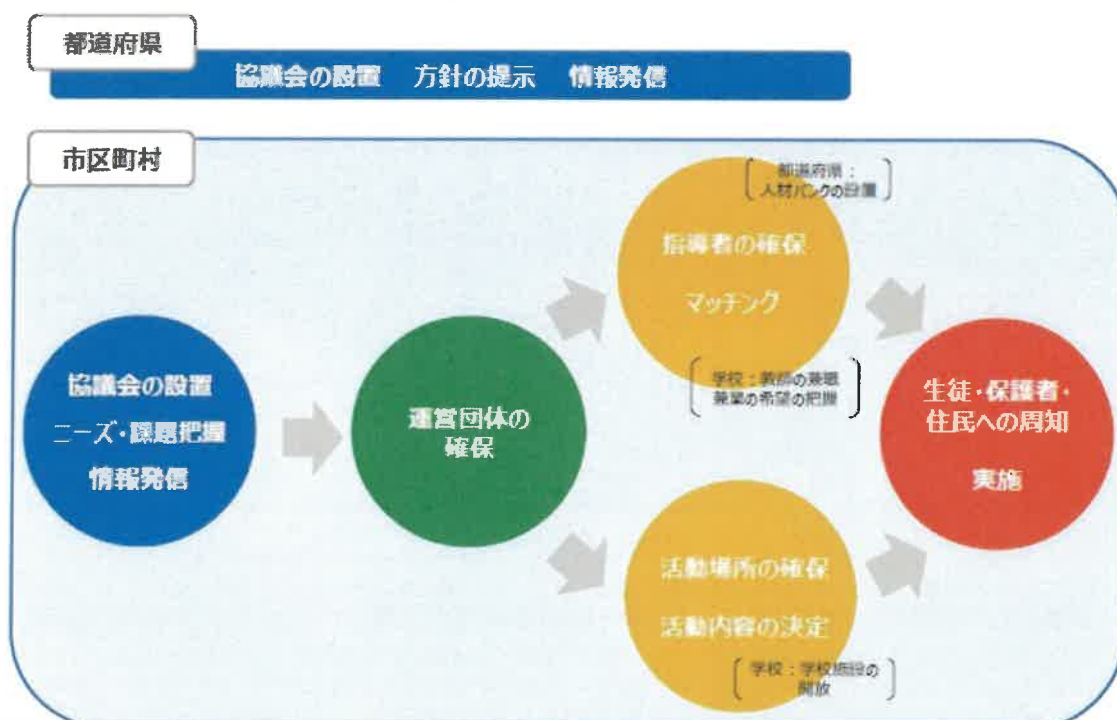
学校部活動の地域連携、地域クラブ活動への移行の全体像（イメージ）





11

休日の部活動の地域移行に係る手順の流れ（イメージ例）



12

県内各市町村の現状 アンケート調査の結果から (12月22日実施・34市町村回答)

【問1】協議会組織(地域移行について検討するための組織を含む)の設置	市町村	%
1 すでに設置済み	4	11.8%
2 令和4年度中に設置予定	1	2.9%
3 令和5年度中に設置予定	16	47.1%
4 その他	13	38.2%

○協議会組織の設置について、すでに設置済みが4市町村、今度中の設置予定を合わせると5市町村となる。

【問2】「協議会開催等に係る経費」の支援	市町村	%
1 今年度中に県の補助を受けて実施することを希望する	3	8.8%
2 今年度中に県の補助を受けて実施することを希望しない	24	70.6%
3 その他	7	20.6%

○協議会開催費の経費について、今年度中に県の補助を受けて実施することを希望する市町村は3市町村である。

【問3】地域移行の本格的な開始年度	市町村	%
1 令和5年度4月当初から開始の見込み	1	2.9%
2 令和5年度中に開始の見込み	4	11.8%
3 令和6年度以降に開始の見込み	21	61.8%
4 その他	8	23.5%

○地域移行の本格的な開始年度について、令和5年度4月当初から開始する見込みは1市町村、令和5年度中に開始の見込みは4市町村で、合わせて5市町村が令和5年度からの開始を見込んでいる。

13

宮城県の課題と現状

アンケート調査から(令和4年9月実施)

【課題】

- 地域の受け皿となる活動団体の確保・育成
 - 指導者の確保
 - 取組に要する経費
 - 協議会等の検討組織づくり
 - 地域・保護者の理解
- など

【現状】

- 移行の準備に取り組む市町村がある一方で、多くの市町村では、実施に向けた具体的な道筋を描くまでには至っていない。

14

宮城県の方向性

○令和4年度 県ガイドライン 第1版 策定

※今後の情勢を踏まえ、随時改訂

○令和5年度 【県】

- ・協議会…各市町村の状況把握と課題の検討
- ・実証事業による成果の普及 など

【市町村】

- ・協議会…関係者での現状と課題の共有
移行に向けた検討
- ・ガイドライン等の策定
- ・地域、学校、保護者等への周知 など

○令和6年度～ 移行開始

県として地域の実情に応じて、段階的な移行に向けて支援していく

変わる学校スポーツ

仙台市立大沢中学校

×

大沢ベースボールクラブスポーツ少年団



最初に

子供たちが全力で走り続けることのできる環境づくり

大人って何のためにいるの？

目標を達成しようとするそのプロセスの中に目的が存在すると思う。目標は子供たちが掲げるものであり、その目標を達成させるべく大人たちがそれぞれの立ち位置をわきまえた上で、最大限の手助けをする。目的の理念を「共有」し、「共感」して、「共鳴」できるようにコミュニケーションを大切にその努力をすること。それが大人たちの役割であると思う。

7分の2を任せる側

7分の5を任せられる側

7分の7の子供たちの
共通認識

大沢BC設立

もともと大沢地区にスポーツ少年団はあったが、指導者不在により消滅



選手の保護者達からの願いによって指導依頼を受け、現在の大沢BCを2001年に設立。

以来、22年間に渡り活動を継続。その間、顧問は7人入れ替わったがその都度話し合いを重ね良好な関係を築き続けてきた。

松原 三郎

- ・仙台商業高等学校野球部出身
- ・その後同校野球部コーチ・監督就任

～現在～

- ・セブンイレブン東北文化学園店 店長
- ・東北文化学園大学経済学部ゼミ講師
- ・大沢ベースボールクラブ
スポーツ少年団監督
- ・NHK高校野球解説員

趣味は無農薬野菜作り！

器

グラウンド・体育館

資金

スポ少年会費・大会参加費
練習中飲料代・移動交通費
保険料・卒団式記念品

人材

コーチ5人・顧問1人

活動場所



仙台市青葉区赤坂1丁目2-1
仙台市立大沢中学校



JR愛子駅から車で9分



文
仙台市立大沢中学校

第一グラウンド

テニスコート

第二グラウンド

大沢中学校前
[仙台市] (バス)

Google

練習風景



普段は
第二グラウンドで練習

冬や雨の日は
体育館で練習



指導者

コーチ 4名
・若山 洋
・増子 元明
・狩野 学
・佐藤 政善

監督 1名
・松原 三郎

顧問 1名
・藤井 彬

基本的には、自分の子供が卒団してから指導者につく。

保護者は3年周期、顧問や校長先生などは定期的に、入れ替わる。
現在の顧問の先生は7人目である。

地域の大人 → 学校の手助けをしている

学校 → 丸投げにせず連携プレー

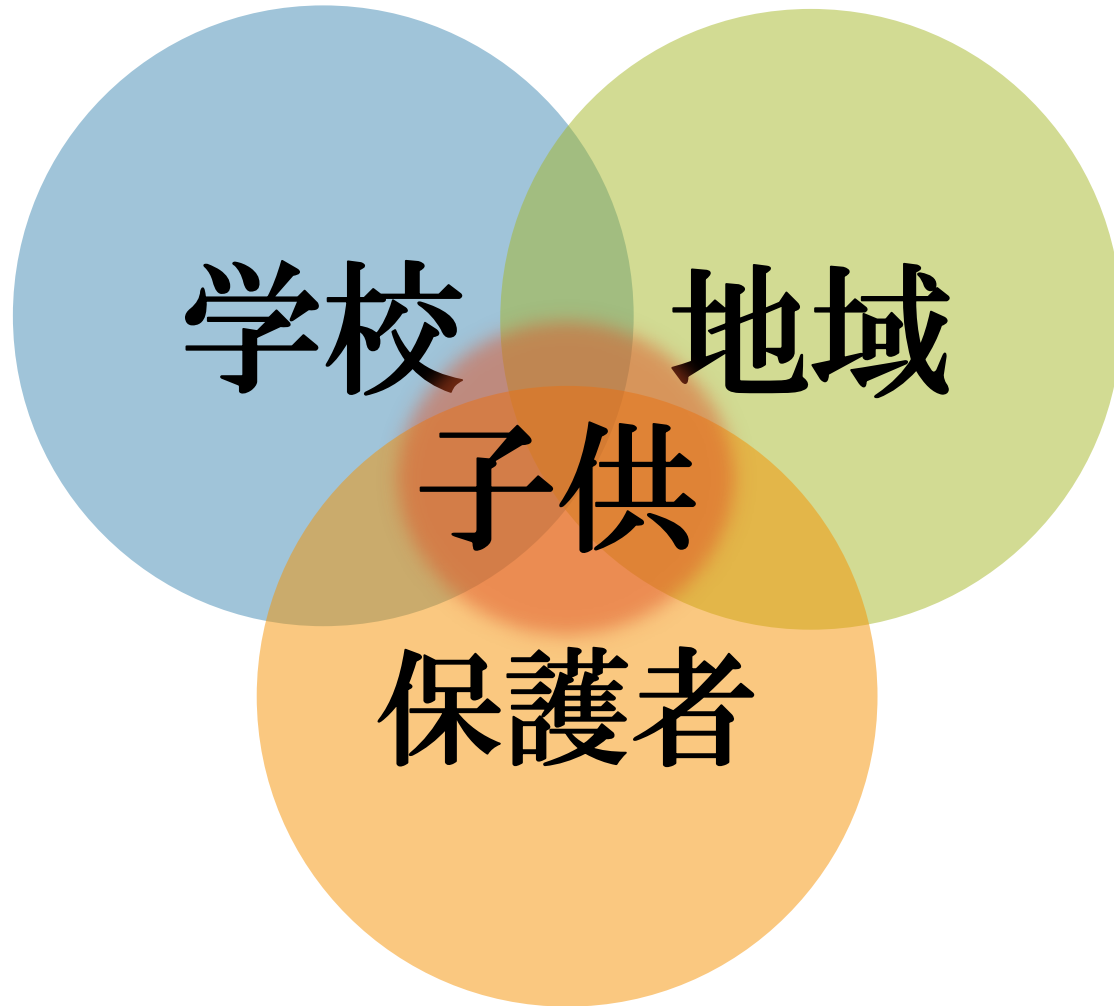
保護者 → アワーサンズの心で見守り

子供たちを中心に
それぞれの立ち位置が重要



この共通認識を持つために必要なことは？

コミュニケーション



合言葉

Our Sons(アワーサンズ)
=私たちの子供たち

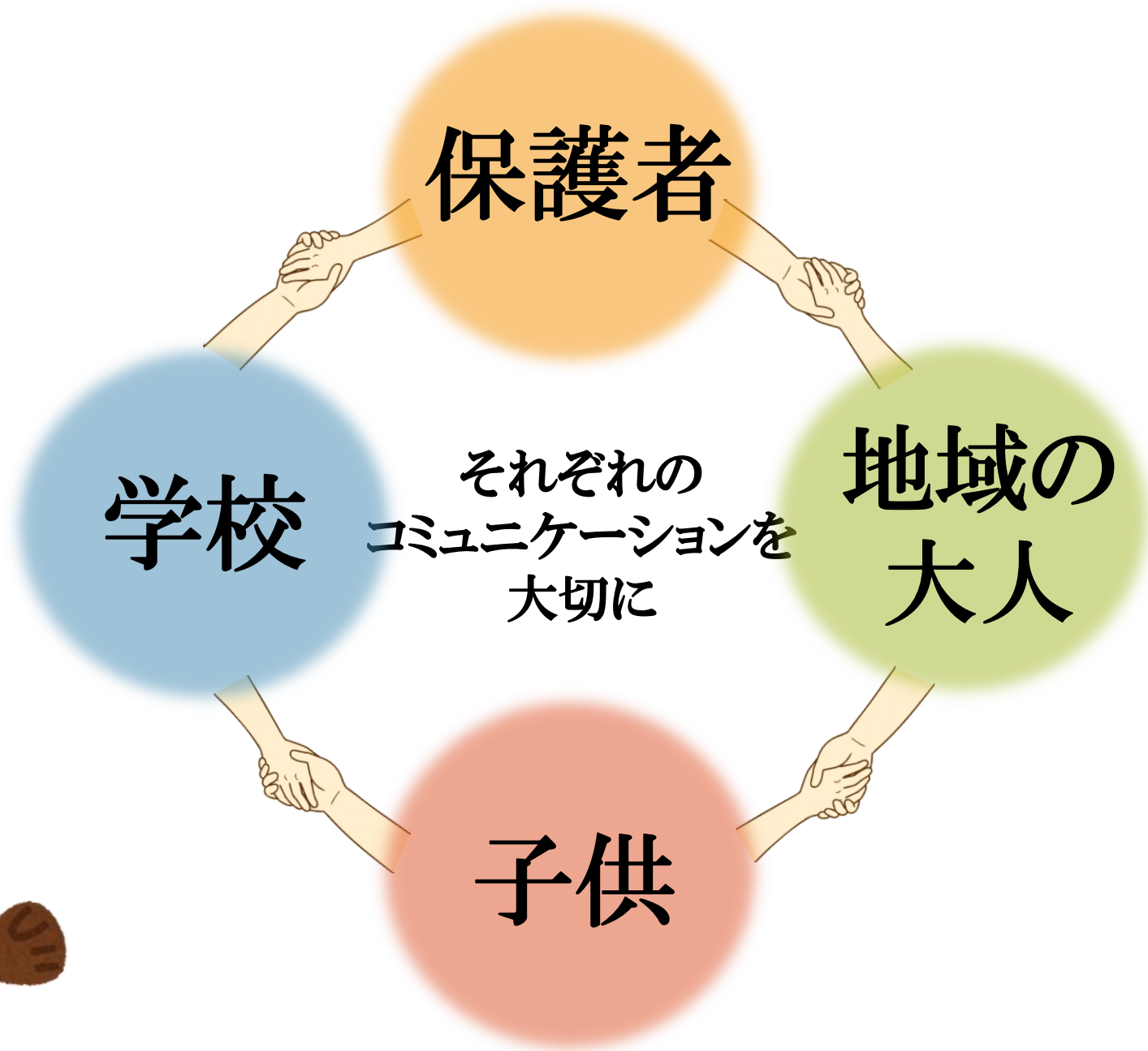
『学校と地域の大人たちと保護者で
子供たちの健やかな成長を支えていきたい』

設立当初からのこの思いを胸に、
地域の大人・保護者・教師が連携して
みんなの子供たちを見守っていく

保護者に伝えていること

My Son(マイサン)
= 私の子供
にならない

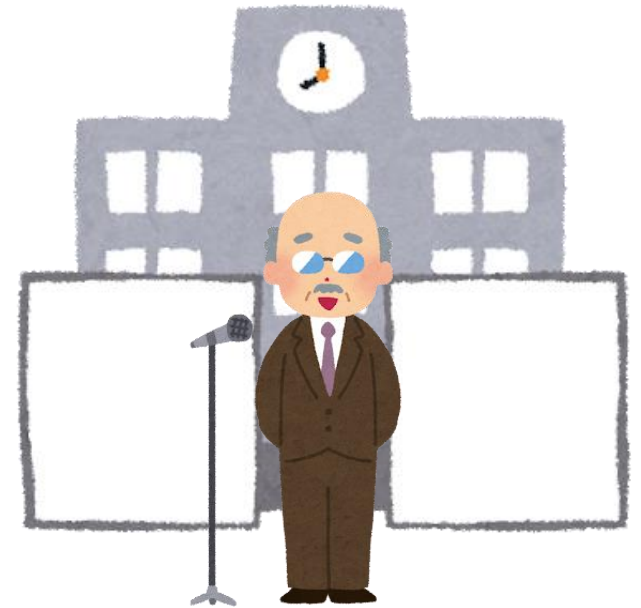
とにかく仲良しでいること！
子供達を愛していること！
それに勝るものはない！



学校側との協力

学校側とも密にコミュニケーションを取り良好な関係を築いている。

学校行事、定期試験、などにより学校として部活動休止としている期間はスポーツ少年団も練習は休みとし、連携をとる。



練習時間などの問題点

平日は放課後の部活動 休日はスポーツ少年団としての活動 と連携がうまく取れている分、活動回数の多さや時間の長さなどが課題として挙げられる。

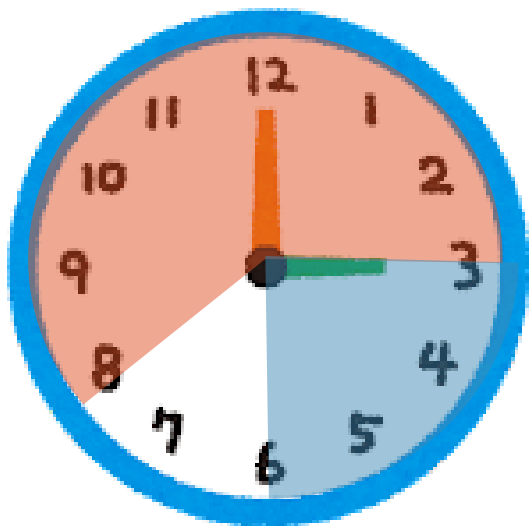
その分、学校長との相談や、話し合いの機会を設けることによりうまく連携を保ち続ける術となる。





フレデリック・ウィリアム・ストレンジ

「部活動」や「運動会」といった活動の礎を築いた
近代スポーツの父



「3時までは知識を学ぶ時間」、「3時以降は人間を豊かにする時間」であるとされていた。

この時から、大人たちがいろんな知恵を出し合いながら子供たちを育て、今現在の部活の活動を伝えるに至っている。

第一步を踏み出すにあたって我々大人たちがフレデリックになり、部活動を再構築、リスタートしていく。

手を携えて、知恵を出し合い、これからの子供たちへいい環境づくりをしていく。

A グループ 蔵王町教育委員会 スポーツ振興課 我妻 秀樹 氏

各スポーツ団体の役割は？

課題についての話し合いがほとんど

受け皿になれる団体となれない団体がある。個人競技団体競技とも活動場所がどれぐらいのキャパがあるか、指導者がひとりふたりで出来るスポーツと、多くの指導者が必要なスポーツがあるので、受け手側では整理しなくてはならない。

その他課題

コーチの謝金について

事例では無償で成り立っているが、実際は好意だけにおんぶにだっこでは発展していかない・継続していかないなので、謝金についても内容を精査していかなければならない
地域移行になった際のダブルエントリーについての問題がある。例えばバレーボール競技であれば部活動、クラブ活動などいろいろなカテゴリーで登録できるが、野球は硬式野球のクラブチームに入っていると軟式野球で部活動では出場できない、そのために文化部に入っているという実情もある。

部活とクラブとが同じカテゴリーで出場できるバレーボールで、「部活動もしている」「クラブ活動もしている」という人が、所属している両方のチームが、新人戦や中総体に出場できなくなった場合、どちらかのチームを選ぶと、選ばなかったチームから「なんでそっちのチームを選んだのか？」などと言われることの「ケアの仕組み作り」を考えていかなければならない

また保護者の教育をしっかり考えていかなければならない

部活動の良い点悪い点

経済的に余裕が無かった人も部活動なら取組めたものの、クラブ活動に移行してしまうと難しくなってくる。例えば部活動なら送迎があまりなくても活動できたが、クラブになって活動場所が遠くなると送迎も難しくなってしまう。このような課題を一つ一つ協議して潰していかなければならない。

こども、保護者、教員が気持ちよく活動できるように、しっかりと話し合いを通して、一方的な意見を押し付けるのではなく、協議の時間を持ちながら進めていく活動をしていければという意見が出た。

約5分

B グループ 角田市スポーツ少年団 馬場さおり氏

スポーツ団体が担える役割について

不安なこと、課題が多く出た。

スポーツ少年団の指導者が担える役割について。小学生を対象としたスポーツ活動の指導者がたくさんいるので、その方たちが中学校へ出向いて指導するということは可能と思われる。但し小学校と中学校となった場合は競技レベルが違うので、そういったところの課題が出てくると思われる。

またAグループでも出た費用の事であるが、現在中学生は登録料をいただかないで活動をしているという話も出た。地域部活動になった時に、講師謝金等の費用も掛かってくると思うので、今までと違った環境の中で家庭での負担も考えられるという意見も出た。

部活動とクラブ活動となった場合、部活動とクラブ活動どちらかを選んで中体連に出場するこ

とが可能ということではあるが、チームスポーツで選抜された場合、どちらのチームで出場するかだれが決めるのか？

子どもなのか、指導者なのか、チームのみんななのかという中で、せっかく楽しくスポーツ活動をしているのに、子どもたちに心的負担になることが心配である。

現在、陸上と水泳は中体連の出場が、所属している部活動以外でもできるようになっているはずだが、来年度以降も継続できるのか？

陸上部が無い学校は、他の運動部が中体連の陸上大会に出場できると思うが、今後どうなっていくのか？という話も出ている。

週末の地域移行活動の中で学校の先生方が指導に携わる時に、先生の立場での指導が難しいのであれば、その種目のスポーツ協会などに入れば先生の立場でなく協会の立場で指導に当たれるのではないかという意見も出ている。

今後たくさんの課題を整理して、安心して部活動の移行ができると良い。

メインは先生方の働き方改革ではあるのだが、子どもたちのための部活動移行ということで、子どもたちが楽しく活動できる環境づくりを進めていければ良い。

C グループ 地域指導者 須藤さおり氏

ヨガの指導者で、部活動にはない種目であるが、その立場での意見を交えて話します。

C グループは4人の話が一致し、方向性が明確に現れた。

各スポーツ団体が担える役割について

まず課題が最初に出た。

- ・運動する場所の確保が難しい。
- ・親の期待がある。
- ・少子化で子供が少ないのでなかなか集まらない。
- ・指導者が少ない。
- ・部活動が地域に移行するときに指導者が少ないということは、結局先生にお願いする形になってしまうかもしれない。
- ・学校の先生の働き方改革もあるので、地域みなさんに子供たちの指導に興味を持ってもらわないといけない。

では私たちが担える役割について

基本に戻って、スポーツは全て楽しむところ始める。もちろん技術の向上も必要だが、まだ小さな子どもたちは自分に合った種目がわからない状態で部活を決めていく中で、自分に合わないのをやめたいと思うこともあるが、一つの部活に決めてしまうのが学校の部活である。

地域に移行した場合、総合型地域スポーツクラブが担うことができるのであれば、選択の自由や多様性を大事にするということがSDG'sでも掲げられていることなので、総合型地域スポーツクラブもこのタイミングをチャンスととらえてみてはどうか？という意見が出た。

運動部だけに限らず、文化部も連動して総合型地域スポーツクラブが引き受けることができるのではないかという、かなり前向きなディスカッションができた。

指導者の問題

一つの種目に特化してその種目の指導者になるということが、固定観念になっているのではない。例えば子どものころからサッカーをやり、大学でサッカーをやり、社会人になってサッカーの指導者になるというような例がある。しかしなかなかそのような指導者がいない。

では、指導者というものを、大人たちのキャリアアップという位置づけで育成してみてもどうか？という意見も出た。

40代、50代になってセカンドキャリアとして、総合型地域スポーツクラブなどが担うかもしれない部活動で指導者としてキャリアアップができるのではないだろうか。

私自身もこれに当たると思うのだが、46歳でヨガに出会い、52歳の今ヨガを教えている。自身を振り返るとキャリアアップだと思う。「主婦をやって、パートをやって、何となくこれで終わっちゃうんだろうな」と思っていたところでヨガに出会い、ヨガ指導の資格を取り、何か地域でやらないかという話になったところで同世代の女性たちに教えた。そのように教えることで自身の人間性がワンランクアップしたような気がする。

しかし指導者というものに固執せず、例えば編み物が上手なおばあちゃんを編み物部の先生に迎えるなど、一つの種目のキャリアを積んだ部活の先生というイメージから脱却し、みんなで地域の子どもたちを支えていけるのではと、まとまった。

定期的に安心して活動ができる場所も大事だし、ドイツの事例では、資格を持っていない「お父さん指導者」が何となく子供たちを集めてワーッと楽しんでやっている中で、課題が出てくれば乗り越えていくために子供たちと一緒に考えて、行動して、課題を解決する力をつけることもドイツの総合型地域スポーツクラブを見習ってやっていけるのではと、まとまった。

D グループ 蔵王町スポーツ少年団事務局 阿部 翔輝 氏

仮題として、指導者の確保、活動場所の確保、市町村ごとの時間給の差が生じる、等があげられた。

役割について

今後、スポーツ少年団や、体育・スポーツ協会が中学生の指導や、やりたい部活の無い学校の生徒の受け皿になっていく必要がある。また学校との連携を大事に、活動を行っていく必要がある。

E グループ 岩沼ジュニアランニングクラブ 須藤 功 氏

仮題三つ

一つ目

中学校の部活とは何か？教育の一環である。これは地域移行しても残していかなければならない。やはり学校の先生の関わりが必要である。学校から全く切り離すのではなくて、少しは先生が関わってほしい。

二つ目

お金の問題である。

我々では解決できない。

東京都は子供一人に毎月5千円出す、という財源もある。しかし地域移行にした時に、スポーツ少年団やクラブチームは、会費をとらないと長く続かないと思う。

お金の問題は、国もどこまで関与するのか？しないのかも含めて検討してほしい。

三つ目

子どもの数が減って、少年団そのものが成り立たない。バレーボールなど団体競技で、一つのチームが3年生から6年生という、学年をまたいでの構成にするしかないのが現状である。

頭数を増やす方法としては、一つの少年団だけでなくその地域の小学校と少年団が統合して、同じ学年だけのメンバーが組めるようにしていくべきではないか。

A グループ

アンケート調査の結果にあった通り、地域移行がなかなか進まない中、様々な問題点と疑問が出された。一番なのは教育委員会と学校の中で話し合いが進んでいない中で、このようなスポーツ団体だけが議論をしているだけだから進まないのではないかとということ。

地域移行を進めていくのは、今の部活動を基本としていくのが良いのではないか。それを基本として地域の指導者がサポートをしていく。といった地域があったが、そこに行きつくまでは様々な問題がある。

そういった中でも小学校をメインとしたスポーツ少年団で、中学校と連携をとりながら活動を行っているところもある。小学校、中学校を核としたスポーツ少年団をメインとして地域移行につなげていく形であった。そういった事例を活用しながら進めていくべきである。

各競技団体、各連盟でもこういった議論があると思うが、各連盟だけではなく中総体という大きな組織と連携を図りながらうまくいく大会運営をやっていただければ。

とりあえずは土日の地域移行ということであるが、現在指導者はほぼほぼボランティアで行っている。平日となった場合、ボランティアでやっている指導者を平日まで拘束してやっていけるのか？

またボランティア指導者が子供たちにどこまで携わって行けばいいのか？といったところも問題である。

B グループ

B グループはアドバイザーの高原さんより質問した事に対して、各立場の意見を出す形で進めた。

まず「今後できますか？」という質問

まだ漠然としている、今からの意見をもとに進めて行っはどうか。

次に「部員が少ない、部活動には協力しているのだけれど、保険などを考えると父兄にとっては大変ではないか。週末に受け入れる側にとっては不安がある。責任が伴うので教育委員会側で考えていただきたい。

地域の団体の情報が無い。、まだと令和6年度でも難しいのではないか。

次の問いは「では、今誰ができるか？」という質問

競技によっては指導者がいない場合がある。

中学校の先生にも指導に携わっていただきたい。

私たちも考えを改めなければならないところであるが、スポーツ少年団は小学生で卒団ではなくて、3歳から上はいくつでも登録可能なのだから、地域型のスポーツクラブという考え方を今みんなで考える時期に来たのではないか。

中学校の顧問の先生方も指導に携わりたいという先生もいるから、地域のスポーツクラブとして先生方にもいづれ一緒に携わってもらうのが良いのではないか。

学校と何ができるか？（学校と一緒にできるか？）

部活動が任意の入部となることも考えられる中で、子どもたちのスポーツ離れが心配になる。

今、情報が少なくて何をしたらいいか分からないが、それぞれの立場で受け入れられる体制にしたい。

C グループ

どこの市町村でも部活の具体的な方向性が定まっていないというのが一つの答えとして出た。

「少子高齢化に対応する」「市町村をまたいだ活動の在り方」という二つの論点に絞って話し合いをした。まず、指導者の高齢化に伴う次の指導者の不足が挙げられた。

また、市町村によっては指導者の競技種目が無く、市町村をまたいだ活動をしているので、地域移行した後の活動だったり、団体作りだったり、より困難になるのではないか、という意見。

中学校に入学しても、やりたい競技が無い子供たちが出てこないように早い対応が必要ではないか、という意見が出た。

D グループ

地域移行についての趣旨や方向性は、今は分かれていると状況にあると、だいたいは理解できるが、十分な議論が進んでいないように思われて、なかなか難しい問題がたくさんあって一筋縄では行かないという受け止め方をした。しかし、ここ数年のところに迫っている地域移行について、なるべく前向きに考えていこうという意見が出た。

指導者の確保の問題

それぞれの中学校区で、部活動を土日に地域移行してもそれを受け取って指導してくれる指導者をどれだけ確保できるかという問題が根本的にある。

岩出山に住んでいる人はほとんどが年寄りで、若い人は仕事に行っている。60～70代で何とか頼めそうな人は「土日は休ませてほしい」という人が多いので、お願いしても困難ではないか。

地域の中で、中学校部活動の指導ができる人を調べて、データ化することが必要。岩出山では現在やっているが、なかなか集まらない状況である。

郡山本部長の話にあった、学校で運動部の指導をしたい大学生は多い様であるが、そのような人は学校に入ったら学校の中で指導したいと思っているのではないだろうか。なので、土日に地域移行するように場合、部活動指導の場面を取られてしまうと思うのではないだろうか？

学校の先生は、学校の教育の領域に入ってくられるのを嫌がる傾向がある。部活を地域に移行してどのように指導されるか分からないという警戒心や不信感を持たれると、うまく行かない。

指導者の資質の問題になるかと思うが、やはり携われる人材をリサーチし、リストを作らなければならない。

小学生でラグビーをやっている子供も多いが、中学校でラグビー部は少ない。中学生になってもラグビーができるような、スポーツを好きな子どもを地域でしっかり受け止めることが必要である。

E グループ

古川の黎明中学校が地域移行モデル校になっているが、発表者は大崎市田尻であるが、何の情報もない状態である。

東松島市からサッカーに関する情報

東松島市には中学校が3校あり、合同練習をする話がある。問題としては、行事があると3校集まれない。そのような時は2校で行うなどの対応でとりあえずやってみる。この取組が成功する、しないは別として、市からは令和8年度から移行するという報告だけ受けている状態。

石巻市から剣道部に関する情報

2重登録ができない状況で、スポ少の保険が切れて活動している子供たちがいる。

大崎市田尻の情報

卓球以外の3つの部が成功する方向である。ハンドボール、バレーボール、剣道は顧問の先生は未経験である。中が校部活の生徒は全員スポ少に入っている。地域移行してもスポ少の指導者が教えるので問題ないが、県からも市からも何の情報も来ていない中で、何をしたらいいか分からないという状況で現場が一番困っている。どのような方向にしたらいいのかというのが、現場の声である。